

付論 2 高蔵遺跡の弥生土器 ―パレススタイル土器群を中心に―

村木 誠

「尾張熱田貝塚の出土品や、最近近江滋賀村の天津宮址で発見せられたもの、如きは、かの希臘クリート土器中、クノッソスの遺品が特に精大で「パレス」式と呼ぶる、如く、弥生式土器中の「パレス」式と称し度い位の優品である。即ちその洒麗なる形態、豊富なる紋様の点などに於いて。」[濱田1929] 濱田耕作が、弥生土器における「パレス」式について初めて言及したとき、その例とされたものの一つが高蔵遺跡（熱田貝塚）出土の壺であった。その後、赤彩のない天津宮址出土品は除かれ、この高蔵遺跡の壺に代表される赤彩、文様を持つもののみが「パレススタイル壺」と呼ばれることとなった。濱田が高蔵遺跡の資料を取り上げたこと自体は、高蔵遺跡の発見がこの地域の他の遺跡より古いということが理由であろう。しかし、その後に増加した資料を見たとき、伊勢湾沿岸の遺跡で、この壺の誕生から消滅までがある程度連続的にたどれるのは、意外にも名古屋台地上の高蔵遺跡に限られること、高蔵遺跡では、数量的にも全期間にわたって多く出土していることに気付く。こうした点から、パレススタイル壺を考えるとときには、研究史的な意味だけでなく、高蔵遺跡の検討が不可欠であることが知られる。

ところで伊勢湾沿岸では、パレススタイル壺と同時期に、赤彩、文様で飾られた壺以外の土器がある。これらを「パレススタイル」と呼ぶか否かは議論がわかれるが、文様自体や文様と赤彩の組合わせという特徴はパレススタイル壺との共通性を十分想起させる。その土器とは、高杯をはじめとして、直口壺、器台といった器種であり、壺とは用途が異なる。しかし、赤彩、文様は、土器の実用的機能とは関わらない上、それぞれの器種において、同時期に、同じ器形で無文、無赤彩のものがある以上、文様、赤彩を敢えて施すには共通の意図があると考えることが必要だろう。また逆に、これらの赤彩と文様で飾られた土器群をまとまりとして考えることで、その意図や背景が明らかになるのであれば、それらをまとめることにためらう理由はない。こうした理由で、私は赤彩、文様によって飾られているという指標による分類が有効であると考え、器種を超えたこの土器群を「パレススタイル土器群」と呼ぶことにする。以下では、高蔵遺跡の資料を中心に、パレススタイル土器群の動向について若干の検討を行う。

1. 土器様式の変遷

パレススタイル土器群が存在する時間としては、弥生時代後期から古墳時代初め頃までである。この時期の土器様式の変化については概要[永井・村木2000]を示したことがあり、高蔵遺跡の資料についてもおよそ同様なものとして理解することができる。ただし、汎用性を意図したため当然個別の遺跡での事例とは一致しない点がある。また、本稿ではパレススタイル土器群を中心に検討するが、非パレススタイル土器群との関係を検討することが不可欠であるから、土器様式全体の推移の理解が不可欠となる。そこで、高蔵遺跡の良好な資料を紹介しつつ、高蔵遺跡における土器様式のおおよその動向を示す。なお、パレススタイルの始まりを考えるために中期の後葉からはじめる。

Ⅳ様式

Ⅳ様式は、凹線文系土器群の出現から消滅までの土器様式であり、従来高蔵遺跡の資料をもとに設定された「外土居式」「高蔵式」という名称で呼ばれた土器様式である。公表されている資料では、前半の資料としてE地点溝1及び溝2、人類史研究所調査地点の1号溝、7号溝などがあり、後半については14次

SD2の資料がある。Ⅳ様式の前半は櫛描文系主体でわずかに凹線文系が含まれ、後半は逆転して凹線文系主体となる。前半は、あまり関わらないので省略し、Ⅳ様式後半を見ておく。14次SD2では、甕も壺もすべてが凹線文系となっている。甕の口縁の端部や台の端部に対するヨコナデの有無や面の形成の仕方が、この様式からⅥ様式にかけての時間的指標になるものと思われるが、この資料ではヨコナデが施されたものは少ない。甕の口縁部は丸く終わっている。細頸壺は数量的に豊富である。太頸壺は個体数が少ないが、直線文と波状文で飾られているものがある。この資料中には無文の壺は存在しない。

V様式

この様式の土器群は遺跡ごとに異なる。広い範囲で斉一的な「様式」ではなく、Ⅳ様式とⅥ様式の間という消極的な意味合いが強い。指標としては、甕の製作技術が変化すること（ヨコナデによって面を持たせる口縁部のつくり、胴部タタキ痕の消滅など）、壺における凹線文系の減少、壺や台付鉢などへの赤彩の開始などを挙げることができる。こうした過渡期に遺跡の特徴が顕著になるが、高蔵遺跡では今のところ全く不明である。次のⅥ-1様式の資料とした1次D3の取り扱いが難しい。

Ⅵ様式

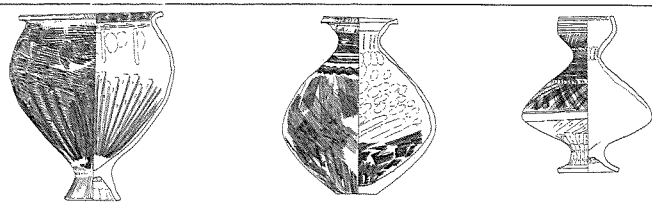
Ⅵ様式の始まりは、個人用の食器の可能性が高い、法量の小さな供膳器の出現を指標としている。前葉の資料として1次D3、34次SB17などがある。Ⅵ様式は「山中式」と重なるところが多いが、前葉はまだ外反口縁の高杯が普遍的にはみられないほか、後に検討するパレススタイルも、全面赤彩や円形の斑点状の赤彩が壺や高杯に見られ、定型化した塗りわけは達成されていない。しかし、Ⅳ様式末に盛行した凹線文系の甕や細頸壺などはなくなるほか、高杯にも小型のものが出現しており、土器様式は一新されている。甕は胴部にタタキの痕跡がなく、口縁部にはヨコナデによる凹面が形成され、左上がりの刺突が施されている。しかし胴部外面はナデで整えられるなど、この様式の典型的なものとはやや異なる。34次調査で中国製の鏡と共伴した土器は、端部がヨコナデはされているが、明瞭な外傾面を持たない甕の台部、外面全面赤彩の高杯脚部など、この時期の特徴を典型的に示している。D3よりは新しいと考えるが、Ⅵ-2様式とする明確な材料もない。Ⅵ様式の前葉は、西日本からの新たな土器を受容すると同時に、それに赤彩を施すといった在地化が生じている。こうした変化の様子を跡付けられる遺跡は限られると思われるが、高蔵遺跡はその中の一つである。

中葉になると、外反口縁高杯も一般化し、直口壺、定型的なパレススタイル壺なども見られ、典型的な「山中式」と言えるものになる。この様式の資料としては、沢上二丁目SB5、夜寒地区SD04、5次SD01などがある。壺のほかに高杯、器台、直口壺にパレススタイルが認められる。Ⅵ様式の中葉はパレススタイルのもっとも多い時期である。後葉は現在のところ良好な資料はない。D地点の環濠らしい溝からの出土資料のうちにこの時期の資料が見られる。時間の指標としやすい高杯は、他の遺跡の事例ではⅥ-4様式頃から無文のものが増え、Ⅵ-5様式で外反から内湾へという変化を遂げるのであるが、高蔵遺跡ではこの様子を跡付けられる資料はほとんどない。これにはまだ資料不足であるという可能性のほかに、この遺跡ではそうした推移を経ずして急激に形式の交替のように生じた可能性が考えられる。高蔵遺跡のⅥ様式資料は、前葉から中葉が多く後葉が少ない。これは他の名古屋台地の遺跡の動向とは逆である。

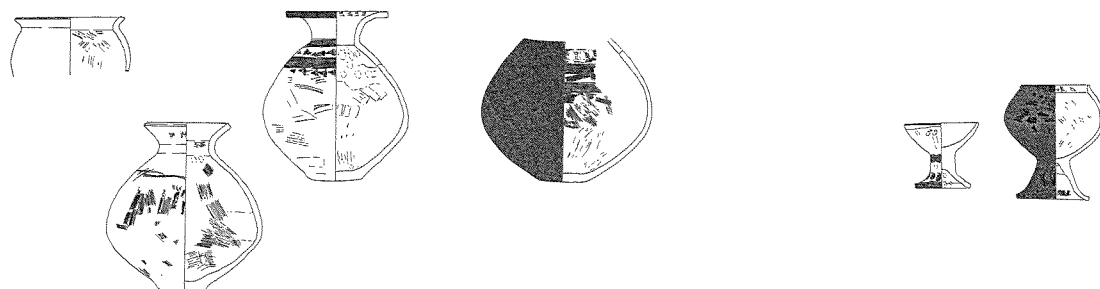
Ⅶ様式

Ⅶ-1様式についてもD地点の溝資料に見られる。D区1層には口縁部が外折するパレススタイル壺と長

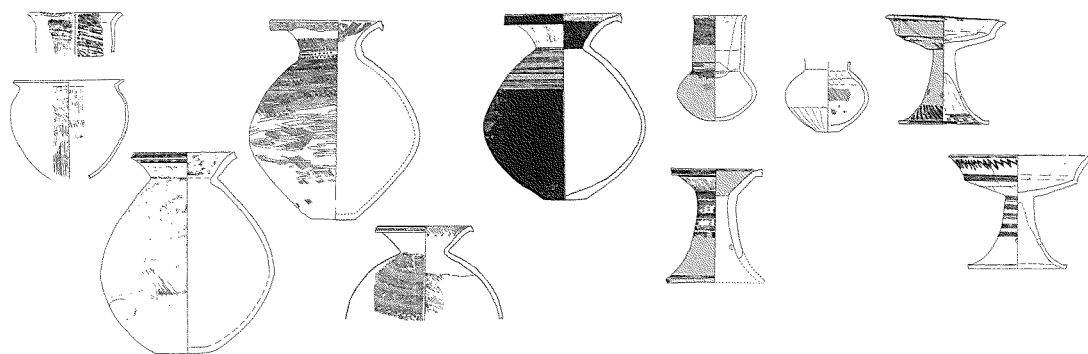
IV
5
様式



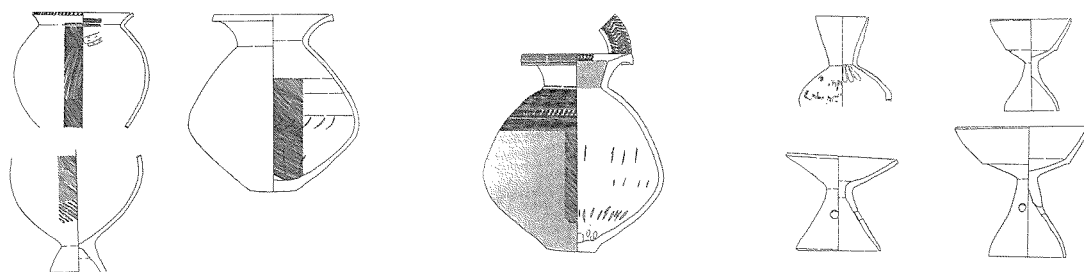
VI
様式前葉



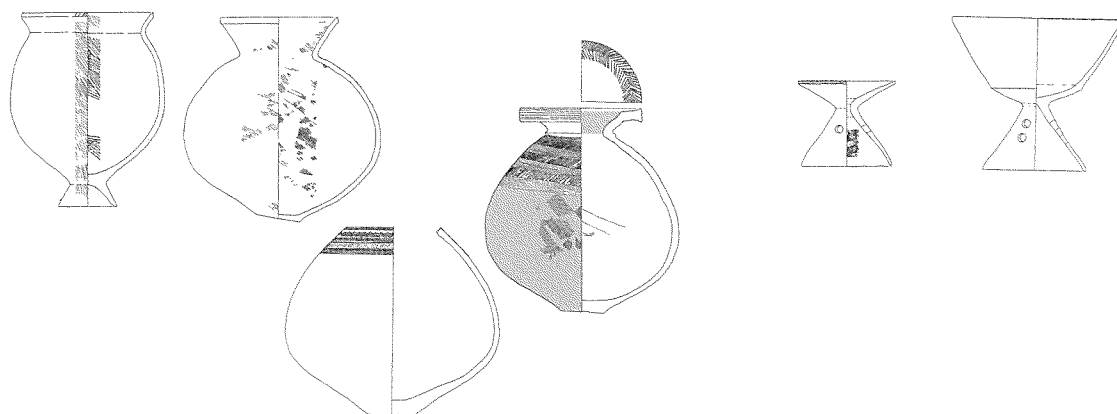
VI
様式中葉



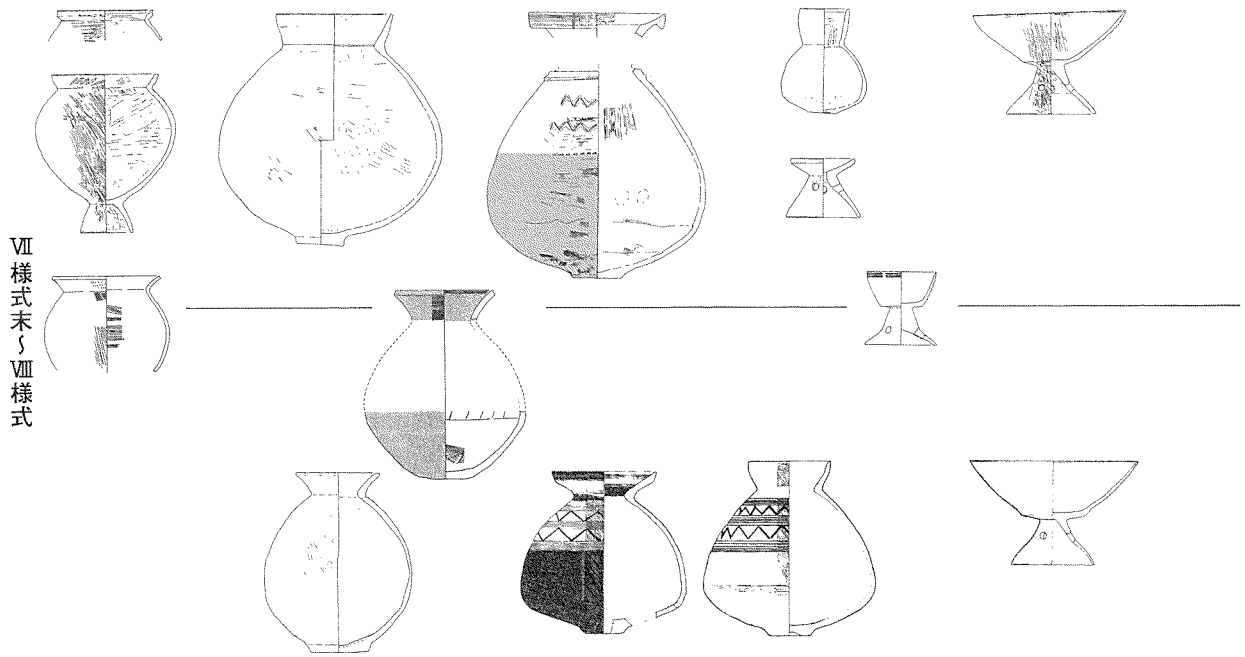
VI
様式後葉
Ⅶ
様式初



Ⅶ
様式中頃



第1図 土器様式の動向 (1)



第2図 土器様式の動向 (2)

脚の内湾口縁高杯があり、Ⅶ-1様式の指標をみたす。高杯は文様、赤彩を失い、杯部と脚部が内湾するものに交替している。ただ、甕などはあまりはっきりせず、資料不足である。

Ⅶ-2様式になると資料は増加する。1次D12、4次SD04、31次方形周溝墓、D地点T、ⅡA区南(部)拡張区第1層出土の資料が該当する。高杯は脚が短くなり、画一的な形態のものが多く出土している。時間的にはS字甕が存在するが、高蔵遺跡では確実な資料はない。

Ⅶ-3様式は次の様式(私は古墳時代とは考えないので、ここでは便宜的にⅧ様式と呼んでおく)との区別が難しいのでまとめて扱っておく。ここで言うⅧ様式は、S字甕B類の登場、小型器台等の出現以降で、S字甕B類新段階が登場し、甕のなかでのS字甕の比率が急激に高くなるまでの様式である。

Ⅶ-3様式からⅧ様式の資料としては、D3上面土器群、34次SB03上面土器群、D地点C区第2層などがやや時間的に溯る特徴を示し、五本松SZ10、SZ2、8次SD01などが後出の特徴を持っている。新しい一群はほとんどパレススタイル壺しかないが、前者では甕のなかにS字甕や受口口縁甕が多い。この様式でも名古屋台地上の遺跡ではS字甕が出土することは多くないのであるが、高蔵遺跡においては相対的に多く見られることが特徴である。

2. パレススタイル土器群の動向

土器様式の大きな流れについて述べたので、次にそのなかでのパレススタイル土器群の動向を考えたい。数量的に豊富で、存在する時間も長い壺から行うが、その作業にあたって対象とする土器を定義しておこう。パレススタイル土器群は、形態や赤彩と文様の関係など、特にその出現当初には極めて多様であり、これをすべて取り入れるための定義はできるだけ緩やかなものがよい。それはおそらく「赤彩と文様が施された土器」というものであろう。更に、後述するようにパレススタイル壺の出現を考える時には、文様を持たず赤彩だけの壺の存在も忘れることはできない。文様はそれ以前の壺と変わらないため、赤彩がな

されることを重視し、先の定義を更にゆるめて、「赤彩をもつ土器」としておく。それゆえ、パレススタイル壺の検討では、赤彩のある壺が対象となる。ここでは、その対象だけを取り出して分類するのではなく、この時期の壺全体を分類した上で、その内のどれがパレススタイルにあたるかという順序で記述する。

2-1 壺の動向

口縁部の形態と胴部文様を分類しておこう。

◎ 口縁形態

1. 頸部が緩く屈曲して外反する単純口縁。
2. 頸部ではっきり折れて外反する単純口縁。
3. 口縁部内面中位で外折したり、段になるもの。
4. 口縁部内面中位に稜を持ち、その上下位が内湾するもの。端面に棒状浮文を持つ。
5. 4が退化し直線的になるもの。

◎ 胴部文様

- A. 無文
- B. 直線文+波状文（これに斜位刺突が加わることもあり）
- C. 直線文+斜位刺突+最下段に扇形文又は円形刺突
- D. 直線文+鋸歯文（+ヘラ刺突）

基本的な分類は、この二つの属性の組み合わせによって行うことができ、弥生時代後期から古墳時代初期の壺は、若干の例外を除けば次の6つのまとまりに分かつことができる。

- I. 口縁形態が1ないし2で、文様などを全く持たない（A）もの。
- II. 口縁形態が1ないし2で、胴部文様がBのもの。
- III. 口縁形態が1ないし2で、胴部文様がCのもの。
- IV. 口縁形態が3で、胴部文様がCのもの。
- V. 口縁形態が4で、胴部文様がDのもの。
- VI. 口縁形態が5で、胴部文様がDのもの。

これらの6つの群については、これまでの研究史〔大参1968〕〔浅井1986, 1987〕〔石黒1997〕で論じられている通り、口縁形態の変化の方向（1から5へという方向）、胴部文様の変遷（B、C→Dという変化）から判断すると、文様を持たないIを別にすると、（II→III）→IV→V→VIという時間的な変化が予想される。以下では、それぞれのまとまりについてもう少し詳細な検討を行う。あわせて、高蔵遺跡での出土例における共伴状況も見ていきたい。なお、赤彩の有無に言及するので、赤彩の仕方を、 α ：全面赤彩、 β ：赤彩で文様を描いたものや、円形の斑点状など一見不規則的なもの、 γ ：一定の幅、特定の部位を単位として塗り分けるもの、と分類しておく。

Iは、中期に見られる凹線文系の太頸壺が文様を失うことによって出現する。高蔵遺跡では今のところ中期の末に無文の壺は見られない。Iには赤彩が施されたものがあるが、赤彩は α 又は β である。1次D3に見られる赤彩壺は、残り具合からみて無文であると判断している。赤彩 β の壺も櫛描文様は持たない。他の壺との共伴状況は、IIからVIまですべてと共伴する。赤彩を持つものは、II、IIIと共伴するほか、V又はVIにも共伴するらしい。

Ⅱも中期の太頸壺から系譜がたどれるものである。口縁内面は無文、扇形文、波状文であり、羽状刺突は施されない。頸部突帯はないものが多いが、円形刺突を施した突帯をもつものがわずかにある。高蔵遺跡の現状の資料中には、Ⅱで赤彩されたものは存在しないことが注意される。Ⅰ、Ⅲを伴う。壺を多く含む1次D3の資料で見ると、波状文が施されるものは多いが、その中には赤彩されるものは全くない一方、赤彩をもつものには文様がない、という対照的なあり方を見て取ることができる。

Ⅲの胴部文様Cは中期には見られない。口縁部の形状も中期以来の1ではなく、2が主体である。口縁部内面は、無文のものも僅かにあるが、基本的に羽状文が施されている。頸部はほとんどのものが突帯を持たない。この中には台を持つものがある。Ⅲには赤彩を持つものと持たないものがあり、赤彩されるものは基本的にγである。赤彩を持つものの方が数量的には多い。Ⅰ、Ⅱと伴うが、Ⅱと伴うものは口縁形態1、胴部に扇形文を持つ。赤彩を持つものはⅠとのみ共伴している。

Ⅳはすべて赤彩γを持つ。すなわち、口縁形態3のもので赤彩のないものはない。口縁部の形態は多様で、もう少し細分の余地があるようにも見える。口縁部内面上位は羽状刺突ものが中心であるが、直線文のものもある。胴部の形態は、下胴部が張るものの他に球胴のものもある。また、斜位刺突の原体には、櫛のほかに貝殻も用いられている。台を持つものも存在し、形態、文様などの点で多様さを残してる。ただし、赤彩はすべて塗り分けられたγである。確実な例ではⅠとのみ共伴し、その他の文様壺とは伴わない。しかしD地点のT.Ⅱ A区南部拡張区第Ⅰ層のようにⅣを含む資料と同時期頃の資料には文様壺が含まれるので、文様壺はわずかに残存するらしい。

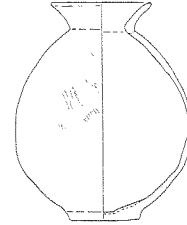
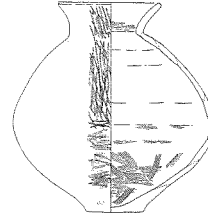
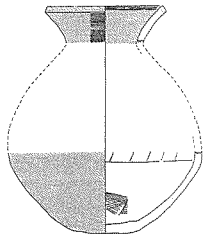
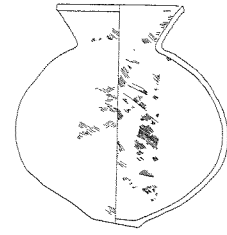
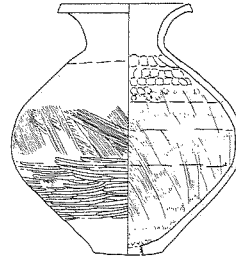
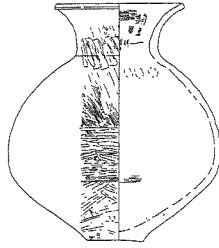
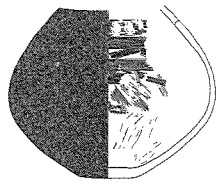
Ⅴもすべて赤彩γである。口縁端面には何れも凹線ないしは擬凹線を持ち、棒状浮文が必ず施される。頸部には断面台形状で赤彩が施された突帯が必ずある。胴部の鋸歯文は櫛又はヘラ描きであり、貝殻のものは見られない。口縁部内面上位はすべて羽状刺突であるが、段数や最下位の刺突の有無などに微妙な個体差を残している。Ⅴに属するものはそれまでの壺とは異なって、形態、文様などが比較的斉一的ではあるが、それでもまだ口縁部文様や、胴部の文様や突帯の段数、胴部文様最下段の刺突文など、小さからぬ個体差が残っていることは認めなければならない。また、この中には、色調が白色を呈するものと橙色を呈するものの二者がある。今はこの二者が何に対応するかは不明であるが、前者がより斉一性が高く見える（注1）。この壺は、Ⅰとのみ共伴する事例と、Ⅰ及びⅥと共伴する事例があり、この二つの共伴の仕方は時間差を表しているものと考ええる。

ⅥはⅤから退化したものであり、すべてが赤彩γを持つ。口縁端部からは棒状浮文が見られなくなり、頸部の突帯も消失する。それ以外の点では一様でなく、口縁形態も個体毎に異なる。Ⅴが比較的斉一なことと比べるとバラツキが大きい。Ⅰ、Ⅴと共伴するほか、例外的な個体であるが、単純口縁の壺に文様Dを施したものと伴っている。

以上まで壺の各群について見てきたが、パレススタイル壺を、赤彩を主たる指標として定義すれば、上記のⅠ、Ⅲの一部とⅣ、Ⅴ、Ⅵのすべてがパレススタイル壺である。以下ではそれぞれをパレススタイル壺（パレス壺）Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵというように呼びたい。パレス壺と赤彩がないものがともに存在するⅠ～Ⅲについては、赤彩の有無に対応して細部の形態や調整方法などの違いはなく、赤彩の有無のみが異なるようである。

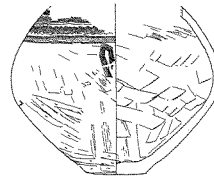
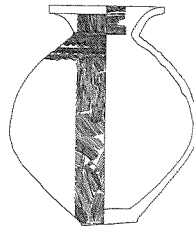
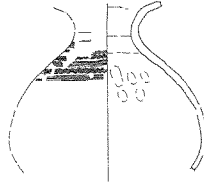
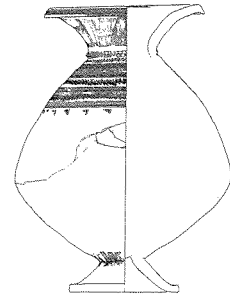
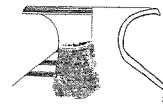
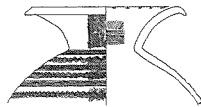
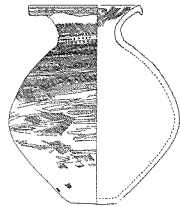
パレス壺の変化と共伴状況をもとに、弥生時代後期の壺の動向を整理しておこう。今述べた共伴状況

壺Ⅰ

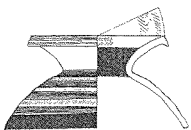
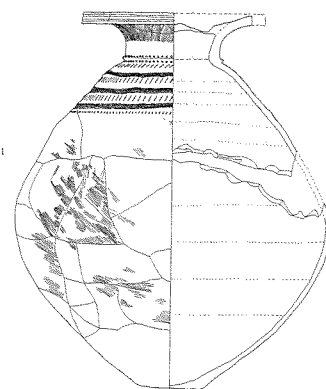
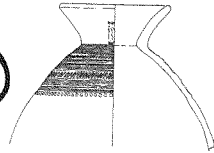
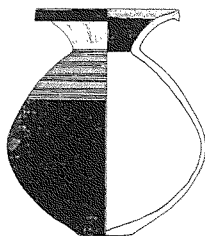


パレススタイル

壺Ⅱ



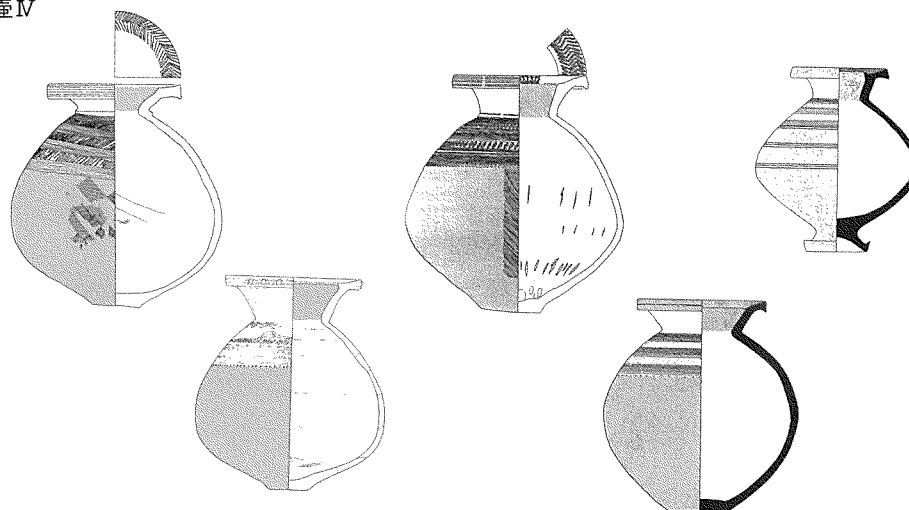
壺Ⅲ



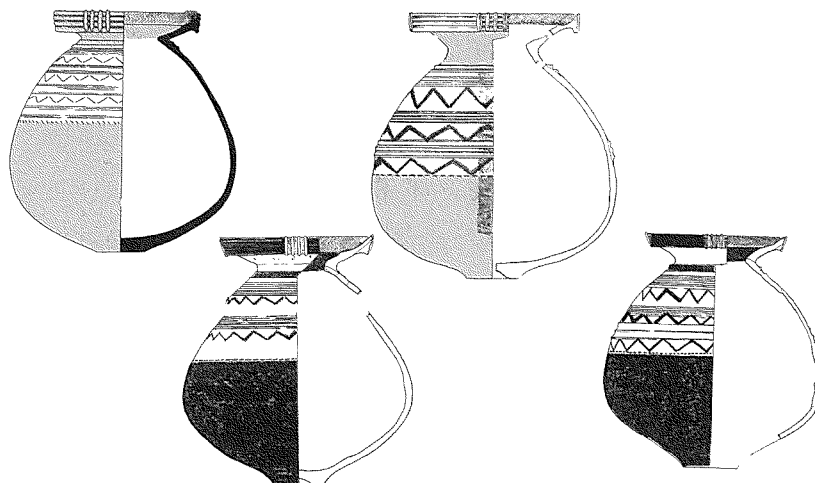
パレススタイル

第3図 弥生時代後期の壺（1）

壺Ⅳ



壺Ⅴ



壺Ⅵ



第4図 弥生時代後期の壺（2）

型式 時期	I	II	III	IV	V	VI
	P	P	P	P	P	P
1 期						
2 期						
3 期						
4 期						
5 期						

第5図 壺の共伴状況（P：パレススタイル）

から、表のようにまとめられる。そして、これをもとに壺の動向は5つの小期に分けて考えたいと思う。すなわち、パレス壺Ⅰと無赤彩のⅡ・Ⅲの時期、パレス壺Ⅲと無赤彩Ⅱ・Ⅲの時期、パレス壺Ⅳの時期、パレス壺Ⅴだけの時期、パレス壺ⅤとⅥが伴う時期である。これを順に1から5期とする。それぞれの時期の評価を行う前に、この壺を基軸としてその他の器種のパレススタイルの動向を見ておこう。

なお、壺の動向による区分は、1期がⅥ様式初め、2期がⅥ様式中頃、3期がⅥ様式後葉からⅦ様式中頃、4期がⅦ様式末からⅧ様式、5期がⅧ様式以降と比定できるだろう。5期まででパレス壺は消滅するが、高蔵遺跡では後続する資料がないため、5期の終りについては不明である。

2-2 その他の器種の動向

その他の器種のパレススタイルはそれほど数量的に多くないので、壺で設定した小期より細分することはできない。そこで、壺の小期にあわせて各時期の状況を整理しておく。

1期については、パレススタイルと呼んでよいのは、1次D3においてブランデーグラス形高杯の祖形のような形態のもの、同じ遺構から出土した台付鉢とでもいうようなものと法量の小さな高杯があるのみである。この台付鉢には、鉢の外面に櫛による波状文、直線文が描かれている。この個体のみ赤彩と文様が共存しているが、台の形状が甕の台に類似するなどやや特異な資料である。これらはいずれも供膳用の土器であるが、中期の高杯と比べると法量が小さく、いわゆる個人用の食器である可能性が高い。資料は少ないが、「個人用食器」と思われるものはすべて赤彩が施されていることに注意しておこう。パレススタイルとしては、赤彩 α 、 β であり、 γ がないのは壺と同様である。

次の2期はパレススタイルがもっとも多く見られる時期である。その器種は、高杯、器台、直口壺である。それぞれの器種で、赤彩されるものとされないものがある。そして、パレススタイルの多くは定型的な塗り分け γ であるが、無文全面赤彩ものもある。文様は、高杯の杯部に関しては波状文、高杯や器台の脚部、直口壺の口縁部については、斜位刺突と直線文からなり、文様も壺と共通している。また、それぞれの口縁や脚端部の形態は、壺のそれに近く、壺との共通性の高さを示している。

2期と3期の間にパレススタイル土器群には大きな画期がある。すなわち、2期に見られた高杯、器台などにおいてパレススタイルの個体が全く見られなくなる。これらの器種についてはパレススタイルがみられなくなるだけでなく、形態も変化を遂げている。高蔵遺跡においてはここに少し時間的な隔たりがあり、詳細に跡付けることはできないが、2期までの口縁や脚が外反する形態から内湾するものへという変化である。これらは2期のパレススタイルのものと同一の組列上につながるわけではなく、途中で主流となる形式が交替した結果であるが、しかしパレススタイルの消滅をその形式の交替だけで説明するのは不十分である。これらの新しい形式の土器も赤彩を施す意図があればできるからであり、このパレススタイルの消滅には、形式が交替したからという以外に赤彩や文様を放棄した積極的な理由があるように見える。そしてこのパレススタイルのものを失った高杯や器台の口縁の端部には、2期に見たような面が形成されることはなく、壺との類似性を失う。内湾する脚部や口縁部の形態等をみると、むしろ甕の台に近づいているように見える。もう一点注意しておきたい点は、Ⅶ-2様式の特徴で述べたとおり、D地点の資料で高杯、器台の数量が急増し、それぞれはバラツキが小さく、類似性も高いように見える点である。

4期・5期はほぼ3期と同様であり、パレススタイルは壺以外に基本的に存在しない。

壺で設定した1～5期は、単に壺の順序を示すだけでなく、パレススタイル土器群の動向の画期と対応させることが可能である。そこで、改めてそれぞれをパレススタイル1～5期として設定する。各時期の特徴を以上を要約すれば以下になるろう。

【パレススタイル1期】

パレススタイル壺Ⅰ、ブランデーグラス形高杯、小型の高杯。高杯は数量少なく、無赤彩のものはない。

【パレススタイル2期】

パレススタイル壺Ⅲ、高杯、器台、直口壺。壺も含めて同一の器形を持つもので、パレススタイルとそうでないものがほぼ同程度存在する。高杯などの数は多くない。

【パレススタイル3期】

パレススタイル壺Ⅳ、高杯、器台、直口壺はパレススタイルがなくなる。以後は基本的にパレス壺のみ。非パレススタイルの高杯の数量増加。

【パレススタイル4期】

パレススタイル壺Ⅴの出現。

【パレススタイル5期】

パレススタイル壺の数量が増加。

3. 各小期の評価

以上によりパレススタイル土器群の動向を述べることができた。ではこの小期のそれぞれをどのように評価し、解釈すべきであろうか。以下では、それぞれにおけるパレススタイル土器群の出土状況などとあわせて若干の検討を行う。

最初に1期におけるパレススタイルの始まりについて考える。まずパレス壺の成立である。高蔵遺跡の資料を見る限り、壺に対する赤彩は文様壺でなく、無文壺への赤彩 α 、 β によって始まるようである。1期には、ⅡやⅢも存在するがこれらには赤彩が施されていない。Ⅱは、他の遺跡の事例を見るとパレス

スタイルとなる個体があるはずであるが、高蔵遺跡には今のところ存在していない。赤彩の始まりが、Ⅰへの全面赤彩に始まるように見えるのは、この欠如による見かけ上の現象という可能性もあろう。しかし、仮に高蔵遺跡にパレス壺Ⅱが存在しても、Ⅰ期の一括資料中には無赤彩のⅡがあり、これと共伴してパレス壺Ⅰがある事からすると、パレス壺Ⅰに先行してパレス壺Ⅱが存在する可能性は低いと思われる。こうしたパレス壺出現の想定は、今後の資料の増加によって変わることもあり得るが、高蔵遺跡では既にⅡは赤彩出現以降のものが相当数出土しており、これに赤彩を施したものがないのは単なる偶然とは考え難い。もちろん他の遺跡では存在するが、それは高蔵遺跡においてこの事象を無視して良い理由にはならない(注2)。このⅡに施された文様はⅣ様式以来の文様であるが、新たに登場する赤彩は、出現当初にはそれとは相容れないものであった可能性を考えてみなければならない。そう考えるならば、壺に対して赤彩が施されるようになるのは、文様を施すべき部分への、文様とは相容れないものの採用なのであり、文様の重要性の相対的な低下ということができよう(注3)。文様のない壺Ⅰがこの時期に出現することも同じ脈絡で理解できよう。文様と相容れない赤彩の出現と文様の欠落、これは同じ事、すなわち文様・文様壺の社会的な意味の低下に対する異なった対応であると見ることができる。

更にⅠ期のパレススタイルについて考えておかねばならないのは、この時期になって新たに出現した高杯などの供膳用の食器がほぼすべて赤彩されていることである。これらの出現の経緯は未だ明らかとはいえないが、多くが西日本から波及してきたことは間違いない。しかし、赤彩はこの地域で新たに加えられた変化とみなした方が良く、ここに赤彩を施すことの意味の一端が表れていよう。すなわち、この新出の個人用食器の実用的、非実用的機能と赤彩が密接な関係があったのではないかと予測される。

出土状況に目を転じると、Ⅰ期の資料が出土した方形周溝墓Ⅰ次D3は、中期末のⅠ4次SD2から時間的には大きく隔たっていないと思われるが、出土する土器の器種構成は著しく異なっている。すなわち、Ⅰ期では壺、高杯などパレススタイルを持つものが主体であるのに対し、中期末では甕と壺が相半ばしている。パレススタイルの出現との因果関係はここではおくとし、この時期には周溝墓で行われた行為そのものが変化したと考えることは許されよう。この器種構成はⅡ期以降にも継続していく。

Ⅰ期のパレス壺について上のように考えると、ではⅡ期になって何故パレス壺Ⅲが登場し、相容れないはずの赤彩と文様の組み合わせが成立するのが問題となろう。ここでも他の器種の動向とあわせて考えてみよう。すなわちこの時期には、文様壺に赤彩が施されるようになったというだけでなく、高杯には杯部に波状文、脚部に斜め刺突などの壺と共通する文様が施されるようになる。つまり、パレススタイルについてみると、伝統的な文様壺に赤彩が施されるというだけでなく、新出の個人用食器が伝統的な文様を持つ、という伝統的なものと新出のものが相互に融合する動きがみられる。これは、新しい器種や赤彩といった新出の特徴が定着し、新来であるということとは別の意義付けがなされたと見ることができるのではないだろうか。それは次のⅢ期以降、無赤彩の文様壺が極めて少なくなり、文様は赤彩と結びついた個体においてのみ残存することからもうかがえよう。なお、この時期にパレススタイルが存在する壺、高杯、器台については口縁端部の処理の仕方など、製作に関する技術という面でも相互に共通性が高い。

このⅡ期のパレススタイルは、Ⅰ期と同様方形周溝墓から出土する例が多いが、住居跡から出土する事例も見られる。沢上二丁目SB5や34次SB15で少数のパレススタイルの高杯が出土している他、高蔵遺跡ではあまりよい事例に恵まれないが、たとえば同じ名古屋台地上の瑞穂遺跡などでは、パレス壺が竪穴住居

から出土する例が何例ある（注4）。こうした事例からは、パレススタイルを方形周溝墓や「祭祀」とのみ関連付けることの不十分さがうかがえるのであり、パレススタイルの果たした機能について、状況に応じた検討が必要であることを示していよう。

次の3期には高杯、器台、直口壺にパレススタイルが全く存在しなくなる。一方でパレス壺は資料が増加している。赤彩を施すことに意味を見出す立場からすれば、壺はそのまま赤彩されつづけるわけであるから、赤彩をすることの意味が変化したのではなく、高杯、器台、直口壺という器種の側に変化があったと考えてみる必要がある。これらの器種については、先述したように形式が交替しているものがあるが、法量に大きな違いはないから、実用的機能ではなく、非実用的機能や用途（使用方法）に変化があったのだろう。そういう目で見えてみると、Ⅶ様式の資料として紹介したD地点で、器台、高杯が数多く出土していることが注意される。この資料の性格はわからないものの、高杯、器台の絶対量が増加したことを示している。これらの高杯、器台は、2期の高杯とは異なり、形態、文様の多様性が失われ、画一化していることも指摘した。すなわち、これらの器種におけるパレススタイルの消滅は、画一化の進展とともに数量の増加を伴っているのである。ここからは、パレススタイルは、数の増加と画一化とは反対の意味を持っていたのではないかと推測する事ができる。また、高杯、器台については2期とは異なり、端部の処理などに壺との共通性はなくなり、内湾する脚部の形態やその端部は、どちらかといえば甕に近くなっている。作り方からもこれらの器種の側に変化があったことをうかがうことができる。

一方、この時期に見られるパレス壺Ⅳについては、口縁形態が多様なだけでなく、口縁内面上位の文様も直線文と羽状文がある等、個体差が残っている。口縁部の形態が外折するものと有段になるもの、口縁内面上位が直線文のものと羽状刺突のものなど多様であることが特徴であると考えた方が良いだろう。高杯、器台とは対照的な変化と言えよう。すなわち、多様なパレススタイル土器と画一的な非パレススタイルという対比が可能のように思われる。パレススタイル壺の出土状況としてはやはり方形周溝墓からの例が多いが、環濠からも出土している。

4期のパレス壺Ⅴは、口縁内面の文様は羽状刺突、端面には棒状浮文を必ず持ち、頸部外面には赤彩のある突帯を持つなど、この壺の組列の中では斉一性が高。しかし、鋸歯文の段数、胴部の突帯の有無等に違いを見せる。この時期に現れるS字甕が、ハケメの施し方まで斉一的なのとは対照的であり、パレススタイル土器は本来個体差の大きいものであると見てよいだろう。出土状況はやはり周溝墓事例が多いが、34次調査では住居跡と思われる遺構からも出土している。

5期のパレス壺Ⅵは、前型式が退化したものという性格が強い。棒状浮文、頸部の突帯、胴部最下段の刺突などが欠落する。退化の方向にあまり共通性はなく、形態は極めて多様である。数は多いものの粗雑で、これはもはやパレス壺を製作し、使用することの意義がなくなりつつあることを示していよう。出土状況でも、1基の方形周溝墓から複数のパレス壺が出土する例が多くなっていることが注目される。

4. パレススタイル土器群の意味（予察）

はじめに述べたように、パレススタイルである事は土器の実用的な機能には関係がない。パレススタイルしか存在しない壺Ⅴ、Ⅵを除けば、法量、形態、作り方などは非パレススタイルのものと変わるところがない。土器の実用的な機能としては異なるところがないわけだから、敢えてパレススタイルの土器を用

いる理由は、その非実用的な機能に求められるはずである。いわばパレススタイルの土器を用いることで表現される何らかの意味があった、と考えられる。本論ではそれを理解するために、土器群の動向や出土のしかたを検討してきた。最後に、これまでの検討からパレススタイル土器群の意味することについてまとめておきたい。しかし、これは高蔵遺跡の事例だけをもとに論じられる問題ではなく、今述べた動向の普遍性の検証から行わねばならない。それは本稿の意図を越えているため別稿に譲るとして、高蔵遺跡の事例から推測されることを述べ、今後の更なる検討の材料としたい。

パレススタイルのもっとも重要な属性である赤彩は、壺では無文のものに対して行われるから、その出現当初は伝統的な壺の文様とは相容れないものであった可能性を指摘した。ところで中期の壺の文様が持つ意味について都出比呂志は次のように述べる〔都出1982〕。「中期の土器文様においては、(中略)地域単位の厳格な約束が存在する。おそらく製作者は(中略)その属する集団内の施文手法の規範を忠実に守っていたと考えられ」、「土器の施文は共同体規制の一つの表現形態である」。これはいわば文様が「共同体」の、集団としてのアイデンティティの表現であった可能性を指摘しているといえるだろう。都出が対象としたのは近畿地方の事例であり、高蔵遺跡を含むこの地域にも同じ説明が可能かどうかは検証が必要であるが、西日本から受容した凹線文系土器を用いたこの地域にも敷衍可能な説明と仮定しておこう。先に述べたように、赤彩がこうした文様の性格と相容れないものだったとすれば、それは「共同体」「集団」ではなく、いわば「個」のアイデンティティを表す個別性の強調、あるいは集団内での示差的表現であったと思われる〔Wiesner1988〕。それはただでさえ個別性を強調しやすいと見られる個人用食器に最初に赤彩がなされたことと矛盾がない。この個人用食器は、出土状況でみたように住居でも用いられているが、パレススタイルのものは数が限られ、すべての成員が用いたとは考え難い数量である。限られた人のみが用いたとすれば、この食器を使用する事が、個別性を強調し、「序列」や「階層」についての示差的な機能を果たしたことを示している(注5)。こうした器種では、パレススタイルがなくなると同時に個体差が消失するとともに数が増えることもそれを支持する。2期以降パレススタイルの土器において赤彩と文様が共存するようになるのは、赤彩ではなく、文様の意味の変質であることは言うまでもない。出土状況の検討で見た通り、パレススタイルの出現と同時に方形周溝墓での土器の器種組成が一変するのも単なる偶然ではなく、赤彩の出現や土器の文様の意味の変容をもたらした変化は、周溝墓における行為の変化をも伴っていたと見るべきであろう〔村木2003〕。

最後に、きたる古墳時代に向けて、「序列」「階層」の差がより激しくなるはずのパレススタイル4期・5期で、壺を残してパレススタイルが消滅してしまう理由を考えておく必要がある。結論から言えば、それはパレススタイルによって示される差がなくなったことを意味しているのではなく、差が顕示されなくなった、と理解すべきである。ここで非パレススタイルの土器へと目を転じると、4・5期は多様な甕が存在し、特にS字甕といった実用性だけでは説明できないものも見られる。こうした甕は使用する単位(住居であるならばその成員)にその集団を意識させる働きがあったと私は考えており、S字甕などはその性格が特に強かったものと思う。こうした甕が用いられるのも、差異を強調するはずのパレススタイルが4期になって斉一的な特徴を持つようになり、5期には数量も増加し、意義を失っていく事とともに、「集団」や「共同体」が意識され、強調される時代を示しているものと思う。

おわりに

本稿では高蔵遺跡でのパレススタイル土器群の動向を考えた。壺だけを取り上げるのではなく、その他の器種も含めたパレススタイル土器群を単位とし、それを更に土器様式の中に位置づけることによってそのもつ意味を明らかにしようと試みた。しかし、甕などのパレススタイルのない器種についてはほとんど触れることができなかった。個別の土器ではなく、土器の関係を問題とする以上、そうした器種についての検討が不可欠であり、今後の課題としたい。

また、この時期の土器については「地域」を単位とするのではなく、それを構成した当時の「集落」単位で考える必要を感じているため、今後は他の遺跡について同様な検討を行い、その動向をパレススタイルに関しては基準となり得ると思われる高蔵遺跡と比較したいと思う。

<注>

(注1) [浅井1987] においてパレス壺の「白色」志向について述べられているが、これが該当するのはパレス壺の一部に過ぎない。

(注2) [大参1968] は、赤彩の開始が本論Ⅳ様式の壺に始まると述べる。おそらく [杉原・小林1989] に掲載されたもの (PL55-131) などが意識されていたと思われるが、その後増加した資料はその想定に否定的である。

(注3) 基本的に文様部には赤彩しない赤彩γも同じように評価できるのかもしれない。

(注4) 瑞穂遺跡の2次4号住居や5次SB02・03等では1点ずつパレス壺が出土している。

名古屋市教育委員会 1982 『瑞穂遺跡発掘調査概要報告書』

服部哲也 2000 「瑞穂遺跡(第5次)」『埋蔵文化財調査報告書34』 名古屋市文化財調査報告46 名古屋市教育委員会

(注5) パレススタイルのものは、実用的な個人用の食器ではないとすることもできる。しかし、瑞穂遺跡2次4号住居のように、非パレススタイルのものとともに出土する例があるが、用途の違いを示す材料はない。

なお、各調査の報告については、本書報告を参照して頂きたい。また図の出典は各報告および [杉原・小林1989] である。

<参考文献>

濱田耕作 1929 「日本の古代土器」『史前学雑誌』第一巻第四号『濱田耕作著作集』第三巻 同朋舎 1989に再録。

大参義一 1968 「弥生式土器から土師器へー東海西部の場合」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』47

都出比呂志 1982 「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社

浅井和宏 1986 「<宮廷式土器>について」『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会

浅井和宏 1987 「『パレス・スタイル壺』小考」『マージナル』No.7 愛知考古学談話会

Polly Wiessner 1988 Style and changing relations between the individual and society

The Meanings of Things. Material Culture and Symbolic Expression I.Hodder (ed.) Unwin Hyman

杉原莊介・小林行雄編 『弥生式土器集成・本編(合本)』 1989 東京堂出版

石黒立人 1997 「尾張地方における弥生時代後期の土器編年」『第5回春日井シンポジウム資料集』

永井宏幸・村木誠 2002 「尾張地域」『弥生土器の様式と編年』東海編 木耳社

村木誠 2003 「弥生時代の高蔵遺跡」『埋蔵文化財調査報告書46』 名古屋市文化財調査報告60 名古屋市教育委員会